

ようである。

(8) 『韋応物集校注』にあるように、この事件は李肇『国史補』(巻中)に見える。「杜太保(佑) 在淮南進崔叔清詩百篇、徳宗謂使者曰：『此惡詩、焉用進?』時呼為『準救惡詩』。」

(9) 『韋応物集校注』にあるように、崔翰の人となりは韓愈「崔評事墓誌銘」(『全唐文』巻五百六十六所収)から窺える。「談諧縱譁、卓詭不羈、又善飲酒。」

「魯山山行」の第二聯と第三聯のつながり

——「随処改」「迷」の表現をめぐって——

白井澄世

一、問題

宋の方面が『瀛奎律髓』で「熊鹿一聯人皆称其工(熊と鹿の一聯、人は皆その巧みさを讃える)」と述べるように、「魯山山行」は第三聯「霜落熊昇樹 林空鹿飲溪」に特徴がある。詩の構造上でも詩人が一番力を入れる部分は起承転結の転にあたる。しかし、方回は続けて「然前聯尤幽而有味(だが、前聯がとりわけ奥深く味があるのだ)」とも述べるように、第二聯「好峰随処改 独径幽行迷」にも「魯山山行」の「特異さ」がある。しかしそれがなぜ「特異」であると感じるのか。私は、第二聯を中心に分析することにより「魯山山行」の特徴を明らかにしたい。その際、分析の対象を「随処改」と「迷」に置いた。「随処改」は「好き峯は処に随いて改まる」というように「変化する景色」である。これに対して「非・変化する景色」(≡静止する景色)が存在し、それらの詩をいささかなりとも読み慣れているから「随処改」の表現を特異だと感じるのではないかという仮説を立てた。そこで、「魯山山行」に至るまでの詩においてどのような景色が詠まれているか、特に「随処」がどのように使われているかを数詩の例と比較し検討したい。

「随処改」は同時代の詩人欧陽修の「遠山」にも使われている。「遠山」は景祐元年（一〇三三）欧陽修二十六歳の時の詩であり、梅堯臣の「魯山山行」はその八年後の一〇四〇年、梅堯臣が三十八歳の時魯山県に立ち寄った際に作られた。⁽¹⁾ 欧陽修、梅堯臣ともに若い頃西崑体を学んだが、それに不満を覚えて西崑体から脱却しようと努め、宋詩の基礎を確立したとされている。この二人が共に「随処改」という表現を使ったことはどのような意味があるのか。梅堯臣は欧陽修「遠山」から「随処改」の表現を受けて「魯山山行」を作ったと言うが、その違いはどこにあるのかも併せて考えてみたいと思う。

一方「迷」という表現を選んだのは、それが第三聯へ続く導入的な文字として、第二聯の末尾に配されていると思うからである。第三聯は熊や鹿の動作が描かれているが、第二聯とは違う視点で捉えられていると私は思う。言うならば第二聯が動態的であるのに比べ、第三聯は静止しているようである。そこにギャップが生まれる。このギャップが良くも悪くも「魯山山行」全体において「特異さ」を醸し出しているのではないか。詩人はそれを意識して「迷」を配置したのではないかという仮説のもと、詩における「迷」の歴史をたどり、いくつかの詩と比較検討することによって「魯山山行」における「迷」の役割を明かにしたい。

二 杜甫の詩・杜牧の詩（唐詩）と「遠山」（宋詩）にあらわれた景色描写の違い——「随処」を中心に

「随処」とは現代でも使用されるように「到处」の意味であり、漢語大詞典は「不拘何地」と説明する。私の概略調査によれば「随処」を使った詩は殆ど無く、それ自身が使用頻度の少ない言葉である。ここでは欧陽修「遠山」以前の「随処」の持つ意味の傾向を、杜甫の詩と比較することによって考えてみたい。

《杜甫「畏人」（人を畏る）》

早花随処発 春鳥異方啼 万里清江上 三年落日低 畏人成小築 偏性合幽棲 門逕從榛草 無心待馬蹄⁽²⁾

〔早花 随処に発き／春鳥は異方に啼く／万里 清江の上／三年 落日低る／人を畏れて小築を成し／性を褊(せま)くして幽棲に合す／門逕 榛草に従う／馬蹄を待つに心無し〕⁽³⁾

早咲きの花は辺り一面に咲き、春の鳥は、ここ他郷でも賑やかに啼いている。はるばる万里に流れる清らかな錦江のほとりに立ち、夕日が落ちるのを見て暮らし、三年が過ぎた。他人と出会うのを憚り、小さな庵を建てて住んでいるが、自分の狭い性分には寂しい栖がよく合う。門に続く小径は草の生えるがままに任せ、馬に乗って来る訪問者を待つ気持などない。

清の仇兆鰲によると、この詩は故郷を離れて他郷に身を寄せる寂寞を述べた詩であると言う。前半四聯は景色を述べ、故郷を思う気持ちを詠む。後半四聯が叙情であり、世間を避け人を避ける詩人の心を表していると解釈する。⁽⁴⁾ 元の趙沄⁽⁵⁾は、杜甫は乾元二年に成都に入り、宝應元年の春まで住んだため「三年」と詠んだのだらうと解釈している。⁽⁶⁾ 故郷を離れて三年、詩人の境遇は孤独であり、人を憚ってひっそりと住まう。辺り一面に咲いている春の花の生命力溢れる様子と、詩人の孤独な寂しさが強い対比をなし、望郷の思いと寂寞が強調されている。

杜甫は「鄆城西原送李判官兄武判官弟赴成都府(鄆城の西原にて李判官兄・武判官弟が成都府に赴くを送る)」の中でも「野花随処発(野花 随処に発く)」という表現を使っている。⁽⁷⁾ 両詩に見られる「随処」は漢語大詞典の「到处」の意味であり、詩人が眺めている(描写しようとする)景色が一面に広がっている様子を詠んだものだろう。その景色は固定的なものであり、静止していると言える。つまり、一幅の絵のような景色が詩人の前に現れているかのようにある。唐代の他の詩人にも「随処」を使った詩があるが、やはりいずれも「到处」の意味で用いられている。⁽⁸⁾ 次に欧陽修の「遠山」を見てみたい。

《欧陽修「遠山」》

山色無遠近 看山終日行 峰巒随処改 行客不知名

(山色 遠近無し／山を看て終日行く／峰と巒は処に随いて改まり／行客 名を知らず)

周囲に広がる山を眺めながら一日中旅をして歩いていく。歩を進めるにつれて次第に峯と巒があらわれるのを目にする。あれらはいったい何という山だろう。

詩人はまず、広がり浸透していく「山」のイメージ(山色)をとらえ、次に、自分の視覚がイメージの中から峯や巒を捉えていく様子を詩に詠み込んでいく。「事物が訴えかけてくるものはイメージのみにはおさまらない。そのおさまりきらないものを表現する試みが「峰」と「巒」である⁽⁹⁾」という。そこには、イメージ(山色)という受け止め方に満足せず、分析的に物事を把握しようとする詩人がいる。ここでは明らかに「随処」の持つ意味が上記の詩と異なっている。杜甫の詩が静止した景色を描写しているのに比べ、歐陽修の詩は変化する景色を表している。だが、歐陽修の詩はもともと変わりゆく景色を描写するのではなく、事物を把握しようとする結果、動き出した事物の様子を詠んでいるのである。そこには静止した景色／変化する景色という単純な対立に留まらず、唐宋知識人の世界観(世界を把握する方法、見方)の違いがあるのではないか。その点も、やはり詩に表れた景色の違いからも見て取ることができるのではないか。そこで山を歩き景色を詠むという共通点を持つ杜牧の「山行」を比較例として挙げる。

《杜牧「山行」》

遠上寒山石径斜 白雲生処有人家 停車坐愛楓林晚 霜葉紅於二月花⁽¹⁰⁾

(遠く寒山に上れば石径斜めなり／白雲生ずる処 人家あり／車を停めて 坐(そぞ)ろに愛す 楓林の晩／霜葉は二月の花よりも紅なり)

寂寥とした山に登り、はるばると石の多い坂道を歩いていく。ふと目を上げると、見上げた目の先には白雲が生じ、白雲の辺りに人家がある。車を停めてたたずみ楓林を眺めると、霜のために紅葉した葉は二月の花よりも真紅に染まっている。

この詩には、霜のために紅葉した楓の葉が二月の花よりも赤いという比喻の妙があり、秋と春の対比がその比喻を強めている。「停車」し、佇んで山の景色を見る詩人が詠むのは、やはり静止した景色である。石径、白雲、人家がまるで一幅の絵のように配置されている。詩人はまた、楓が赤く染まっている景色を見出したその瞬間の驚きと喜びを詩に詠み込んでいる。

杜甫の詩でも、一面に広がる花、啼く鳥、夕日、草といった景色に、詩人の寂寞や望郷の思いを対比させている。「三年」という時間の流れが詠まれていても、それは詩に時間的な厚みをもたらすというより、三年の間に蓄積された現在の寂寞を強調するものだと思ふ。ゆえに詩に表れているのは詩を詠む瞬間に感じている寂寞であり、寂寞が投影された景色である。それは分析の結果表れた景色ではない。杜甫の詩や杜牧の詩に見られるように、唐詩には感情を燃焼させ、その瞬間的な情熱を詩に詠み込むという傾向があるようだ。唐詩二首と「遠山」を比較すると次のような傾向が見られると私は考える。唐詩↓瞬間的な感情の投入・燃焼↓静止しているような、瞬間的に眼前に広がる景色⁽¹⁾・宋詩↓事物に対する継続的な視点↓分析↓生成する景色。

同様に「魯山山行」にも分析の視点がある。第二句で高く低く存在する千山を詠み、さらに第三句で次々と形を変え、る峯を描写している。ここでも詩人の視点が事物を新たに捉え直した結果、変化する景色が詠まれているのだろう。しかし詩人はその視点を第三聯につなげるのではなく、「迷」うことによってその視点を一変させていると私は思う。というのは、熊・鹿は分析の結果表れた景色ではないと考えるからである。

三. 「魯山山行」―「迷」を中心に

それでは、「迷」はどのような意味を持つのか。参考に「魯山山行」の日本語訳を見てみると、「迷」の解釈が微妙に異なっている。①「ちように自然を愛する私の心にぴったりだ。無数の山は高くまた低く、みごとな峰峰は場所

ごとにおもむきを変える。うす暗い小道を独りでわけていつたら迷ってしまった。霜がおりて熊が木のぼりをし、ひっそりとした林で鹿が谷川の水を飲んでゐる。人家は一体どの辺りにあるのだろう。雲のむこうで鶏が一声鳴いた。」②「ふとした機会にこのたび、平生から自然のふところに入りたいと思つたのが、これですつかり満足することができた。山々が、高く低くつづく。ゆくほどに形のよい峰が、次々と眺めを変え、奥深い人気のない小路は、一人では迷いそうだ。秋もおしつまつて、霜がおり、熊が木にのぼつて木の実をとつていたり、木の葉をすつかりおとして、隙間が多くなつた林の向こうには、谷川で水を飲んでゐる鹿の姿が見えたりする。こんな山奥では、人の住んでゐることもあるまいと思つてゐると、雲の彼方から一声、鶏の鳴く声が伝わつて来た。さては、こうした山の中にも人が住んでゐたのかと、そこに住む人をうらやましく思つたりした。」③「野趣を好むわが心とまさに合致して、千山は高くまた低く、形のよい峰が見る場所につれて姿を変え、かすかな小道をひとり踏み迷いつつ行く。霜がおりて、木に登つてゐる熊、林はしんかんとして、谷川に飲んでゐる鹿。人家はどこにあるのかしら。雲の彼方で一声鶏が鳴いた。」④三つの解釈の中で「随処改」はほぼ同じ解釈であるが、「迷」の解釈が異なつてゐる。言うならば、「迷つてしまつた」という已然形、「迷いそうだ」という未然形、「迷いつつ行く」という同時進行形である。この三つは同じものではないと私は考える。というのは、已然と未然、同時進行では、詩人がその後の熊・鹿をどのような場・観点で捉えてゐるのが異なつてくるからである。つまり、同じ場（第二聯の延長）で熊・鹿を見てゐるのか、新しい場（第二聯とは異なつた場）にゐるものとして見てゐるのか。それを見究めることによつて、この詩の調和についても考えることができるのではないか。

「迷」という表現は非常に数多くの詩の中で用いられてゐる。「迷」は一語だけではなく、「迷路」や「迷津」といった語句でも用いられる。ここでは以下の点に絞つて幾つかの詩を比較例として挙げた。①「魯山山行」との比較を考へる上で有用だと考えられる詩。ただし「迷」という語の共通性だけにとらわれることを避けた。②「魯山山行」の

「徑…迷」との関わりから、徑(道路)に「迷」う詩。③「随处」での比較を活かすために、唐代と宋代の主な詩。但し都合の良い詩だけを選ばないように、例に挙げた詩人の詩において、別の意味を表す「迷」が使用されている場合は脚注に付すようにした。

まず、第二節で触れた杜甫を見てみると「迷」を使つた詩は非常に多い。「魯山山行」と共通して「熊」を扱つたものに「石龕」があるが、ここでも「迷」が使われている。「熊羆哮我東 虎彪号我西 我後鬼長嘯 我前猿又啼 天寒昏無日 山遠道路迷 驅車石龕下 仲冬見虹蜺 伐竹者誰子 悲歌上雲梯 為官采美箭 五歲供梁齋 苦云直簞 尽 無以充堤携 奈何漁陽騎 颯颯驚烝黎(熊羆 我東に哮え/虎彪 我が西に号ぶ/我が後に鬼は長く嘯き/我が前に猿は又た啼く/天寒く昏くして日無く/山遠くして道路に迷う/車を驅る 石龕の下/仲冬 虹蜺を見る/竹を伐る者は誰が子ぞ/悲歌 雲梯に上る/官の為に美箭を採り/五歲 梁齋に供す/苦(ねんごろ)に云う 直簞は 尽き/以て堤携に充つる無しと/奈何ぞ 漁陽の騎/颯颯として烝黎を驚かす)。熊・虎・鬼・猿が啼き吼える山中に詩人はいる。そのうち日は暮れ、あたりが恐ろしい空気で囲まれる様子が詩の前半で描かれる。山道はどこまでも続き、どこへ向かつているかも分からなくなりそうだ。詩の後半では、恐ろしい岩、凄まじく冬の空にかかる虹、それに続いてもの悲しい歌や安祿山の乱による人々の苦しみというような暗い状況が描かれる。ここでの「迷」は、前半で描かれた恐ろしい雰囲気強化し、詩人の心にある不安感や畏怖の感情を拡大して表す役割があると言えよう。次の詩は、舞台は山ではないが「迷路」の意味を象徴的に表しているものとして例にあげる。詩人が、「迷路」にどのような思いを託して詩に詠むかという一端がうかがえる詩である。

《杜甫「逃難」(難より逃る)》

五十頭白翁 南北逃世難 疎布纏枯骨 奔走苦不暖 已衰病方入 四海一塗炭 乾坤万里内 莫見容身畔
 妻孥復隨我 回首共悲歎 故国莽丘墟 鄰里各分散 歸路從此迷 涕尽湘江岸⁽¹⁵⁾

(五十) 白頭の翁／南北 世難より逃る／疎布を枯骨に纏い／奔走するも暖ならざるに苦しむ／已に衰え病方に
 入らんとす／四海は一に塗炭たり／乾坤 万里の内／容身の畔見るなし／妻孥また我に随い／首を回らして共に悲歎
 す／故国は莽として丘墟たり／鄰里 各分散す／帰路 此より迷い／涕は尽きる 湘江の岸)

五十の白髪の老人となつた私は、世の中の災難を逃れて転々としてゐる。ポロ布を骨と皮ばかりに瘦せた体に纏い、
 坐つた所が暖まる暇も無く、あちこち奔走して苦しい日々を送つてゐる。私の体は衰え、病気はいよいよひどくなつ
 ていく。天下の人々は皆どこでも非常な苦しみを味わつてゐる。世界は広々と万里に広がつてゐるのに、私が身を落
 ち着ける場所すら見つけられない。それでも妻子は私に随い、溜息をついて共に嘆く。故郷は荒れて廢墟となり、村
 の人々はちりぢりになつてしまつた。故郷へ帰る路はこれからいよいよ迷ふことだらう。湘江の岸に立つて、嘆きの
 あまり涙が尽きてしまつた。

詩人は、天下の戦乱を逃れて転々とする悲しみや苦しみを歌つてゐる。注目したいのは「迷」が「帰路」或いは
 「帰」と一緒に用いられてゐることである。それはこの詩に限らず、杜甫の詩でしばしば使われる表現である。例え
 ば、「散愁二首(愁を散ず二首) その二」では、「老魂招不得 帰路恐長迷」(老魂 招き得ず／帰路 恐らくは長く
 迷はん)とある。戦乱によつてはるか遠くにゐる詩人が自分の終生を思い、悲哀を感じてゐる様子を、「私の老いた
 魂は異国をさまよい続け、故国の人々も招き寄せることはできない。故郷へ帰る路は永久に迷ふのであろう」と表現
 してゐる。また「佐還山後寄三首(佐の山に還りて後に寄す三首) その一」では「山晚浮雲合 帰時恐路迷」(山晚
 れて浮雲合し／帰時 路に迷はんことを恐る)とある。自分(詩人)を心配して家へ来てくれたあなた(佐)が帰り
 道に迷わないようにと、相手の身を思つて詠んだ詩である。これらの詩の主題は「石龕」「逃難」とは異なるものの、
 「帰路」の喪失という事態が詠われていることに変わりない。以上、杜甫の詩に共通してゐるのは、路に迷ふ＝「帰
 れなくなる(帰路の喪失)」状態に対して、不安・恐れ・悲哀・とまどいといった消極的な感情を表していることで

ある。⁽¹⁶⁾つまり、「迷」の状態は詩人にとって不安・恐れ・悲哀の状態であるのだ。逆に言えば、「帰」りたいという目的・希望が前提にあり、それが不可能であるがゆえに強調される不安・恐れ・悲哀（と共に暮る帰りたいと言う気持ち）を詩人は詠っているのである。それは「佐還山後寄三首」のような他人を心配する詩も同様である（無事に帰って欲しいという気持ちを表している）。「佐還山後寄三首」や「石龜」では、「迷」の後は人間にとって不安をかき立てられるような恐ろしい景色が展開する（「佐還山後寄三首」では暗い村や寒い川／「石龜」では不吉な虹）。それは、目的（目的地）喪失の不安とともに「迷」の後の漠然と広がる空間（行き先不明の空間）を表しているとは私は考える。「迷」は読み手に漠然と広がる空間を感じさせ、同時に詩に詠み込まれた不安感・絶望感・悲哀を殊更に高める効果をなしていると思う。この傾向は唐詩の特徴なのだろうか、或いは杜甫の詩の特徴なのだろうか。同時代の李白、白居易も例に見てみる。

《李白「奔亡道中五首」（奔亡の道中五首）その五》

森森望湖水 青青蘆葉齊 帰心落何処 日没大江西 歇馬傍春草 欲行遠道迷 誰忍子規鳥 連声向我啼⁽¹⁷⁾

（森森として湖水を望めば／青青として蘆葉齊し／帰心 何処にか落つ／日は没す 大江の西／馬を歇めて春草に傍り／行かんと欲するも遠道に迷う／誰か忍びん子規鳥／連声 我に向かつて啼くに）

広々と水の張る湖水を望み見ると、湖のほとりには蘆の葉が青々と茂り、その高さは一様に揃っている。故郷に帰りたいと思う心は大変切ないものがあるが、それもかなわず、我が身は何処へ落ちて行くであろうか。太陽が大江の西に沈んでいくように、自分も揚子江の西の方に落ちて行く。一時馬を休ませて、春草の傍にたえずんだ後、進んで行こうとするのだが、遠い道のために迷ってしまう（途方にくれている）。他郷を旅する遠客である自分に、ホトトギスは「不如帰（帰るに如かず）」としきりに鳴きかけるのだが、その声は悲しく聞くに忍びない。⁽¹⁸⁾前半は湖水、日没といった広がりゆく景色を詠い、後半では他郷を行く征行の苦しみを述べている。ここでもやはり望郷の思いが

「迷」とともに詠われている。

《白居易「重到渭上旧居」(重ねて渭上の旧居に到る)》

旧居清渭曲 開門当祭度 十年方一還 幾欲迷歸路 追思昔日行 感傷故游処 挿柳作高林 種桃成老樹
 因驚成人者 尽是旧童孺 試問旧老人 半為繞村墓 浮生同過客 前後追來去 白日如弄珠 出沒光不住
 人物日改交 挙目悲所遇 回念念我身 安得不哀暮 朱顏銷不歇 白髮生無數 唯有山門外 三峯色如故⁽¹⁹⁾

(旧居 清渭の曲／門を開けば祭度に当る／十年 方に一たび還れば／幾ど歸路に迷わんと欲す／追つて思う昔日の行／感傷す 故游の処／挿柳 高林と作り／種桃 老樹と成る／因りて驚く 成人の者／尽く是れ旧童孺なるを／試に問う旧老人／半ばは繞村の墓と為る／浮生は過客と同じく／前後 追つて來去す／白日 珠を弄するが如く／出沒 光住らず／人物は日に改交し／目を挙げて所遇を悲しむ／回念して我身を念えば／安ぞ哀暮せざるを得ん／朱顏銷して歇まず／白髮 生じること無數／唯有る山門の外／三峯の色 故の如し)

旧居は清らかな渭水のほとりにあり、門を開ければちょうど渡し場に対面している。十年ぶりに帰ってみると様子が変わっている。故郷に帰ってくる道に迷いそうである。昔散歩したことを思い出し、遊んだ所を見て感慨を催す。昔私が植えた柳は高く繁つて林となり、植えた桃は老樹となっていた。特に驚いたのは、昔子どもだった人は皆成人していることだ。昔居た老人のことをたずねてみると、彼らの半分は村のまわりの墓に入っていた。人生は旅人と同様なもので定めなく、月日は曲取りの玉のように光を留めることが出来ない。人と物は日に日に変化する。目を挙げて現在の自分を見れば悲しくなるが、自分の過去を考えてみれば自分が老いているのも当然である。若かった容貌は跡を留めず、頭は白髪ばかりだ。変わりゆく自分や故郷に比べて、ただ山門の外にある山の峯々だけが昔のまま変わらない。⁽²⁰⁾

この詩は杜甫の詩と多少異なり、故郷への歸路が喪失したという「迷」ではない。しかし記憶に残る昔ながらの故

郷（あるべき故郷の姿）の喪失が「帰路に迷う」という表現で表されている。やはりこれも一種の故郷喪失と言えるだろう。故郷喪失に伴う悲しみと無常の時の流れに対する悲哀が、泰然として悠久である自然（三峯）と対比して述べられている。

以上の詩を見ると、杜甫・李白・白居易の詩には、多少の相違はあるものの共通する構造がある。それは上述したように「（故郷等の）存在するべき場所の喪失↓「迷」↓不安・恐れ・悲哀（と共に強い望郷・帰郷・回帰の思い）↓漠と広がる空間（不安・恐れ・悲哀）」という一連の流れである。例えば杜甫の詩「逃難」では、故郷喪失↓「迷」↓涙↓湘江の岸、李白「奔亡道中五首」では、帰心（望郷）↓「迷」↓不如帰の鳴き声（忍びない心）、白居易「重到渭上旧居」では、帰路↓「迷」↓悲哀↓三峯という詩の流れである。これを念頭に置き、晩唐の詩を見てみたい。

《李商隱「鳳」》

万里峰巒歸路迷 未判容彩借山鷄 新春定有將雛菜 阿閣華池兩処棲

（万里の峰巒 帰路迷い／未だ山鷄を借りて容彩を判せず／新春 定めて雛を將（ひき）いるの菜有るも／阿閣華池 兩処に棲む）

万里の山々（峰と巒）の中で、帰路道に迷ってしまった。鳳凰は山鷄のように自分の容貌を身繕いしたりしない。春にはきつと妻は子を守り大事に育てているだろう。（鳳は）阿閣、華池の二つの地に別れ別れに棲んでいるのだ。

この詩の第二句の解釈は三通りある。まず清の程夢星は「第二句は妻のことを述べ、山鷄のように身繕いをおかまってはいいないだろうと思ひやる」と言い、詩人が自分と離れている妻の様子を思うものだとして解釈する。次に清の屈復は妻の美しさを詩人が思っているとして解釈する。三に、清の馮浩の解釈は全く異なり、第二句は自分の才能を誇る句だと解釈する。⁽²⁴⁾ それらを受け、劉学錯・余恕誠は馮浩の注を正とし、程夢星と屈復を誤としている。ただし、第三句は遠く離れた妻と子の楽しみ（子を守り育てるといふ楽）を思い、第四句は離れ離れに別れて家族の愛情を楽しめな

いことを嘆く句であり、そのため「帰路に迷う」と呼応していると説明しているのは、どの解釈にも共通している。⁽²⁵⁾
 第二句の意味を厳密に説明する余裕はないが、ここでは仮に訳は程星夢の解釈によった。重要なのは、この詩でもやはり「帰」と「迷」が同時に述べられ、存在すべき「帰路」を失ったことへの消極的な感情が表されていることである。前述の杜甫や李白の詩とはかなり異なる雰囲気を持つているが、帰路の喪失とその先に存在するものへの慕情（「鳳」では妻への思慕）といった共通の前提が設けられているようだ。また、同じ晩唐の詩人温庭筠にも「迷」を用いた詩がある。

《温庭筠⁽²⁶⁾「送洛南李主簿」（洛南の李主簿を送る）》

想君秦塞外 因見遠山青 榭葉曉迷路 枳花春滿庭 綠優仍侍膳 官散得專經 余亦還愚谷 婦心在翠屏⁽²⁷⁾

（君の秦塞の外たるを想い／因りて遠山の青きを見る／榭葉は曉に路を迷わせ／枳花は春に庭に満つ／緑優ればすなわち侍膳し／官散なれば專經を得ん／余も亦た愚谷に還らん／婦心は翠屏に在り）

秦塞の外という遠い地方に居る君の事を思つて、青々とした山を見る。山の柏の葉は繁り、曉に歩けば茂つた葉のために道に迷うことだろう。からたちの花は春になって庭いっぱいになり盛りと咲いている。緑（給料）が高いのであればしばしば上司に従つて食事をとにもするが、仕事が閑になれば専ら経を読んですごしている。私も愚公谷に還ろうと思う。帰りたいという心は翠屏（緑深い山の奥）に向かつているのだ。

遠い地方へ行く友人を思つて詩人の心も外へ向かう。目をやれば、遙か遠くに青々とした山が見える。詩人の心は「俗」の生活（緑優仍侍膳）から隠者や隠居した人が住む「聖」の場所へ向かう（余亦還愚谷）。ここでもやはり「迷」と「帰」（婦心）がセットになっている。しかし、詩人は「俗」と「聖」の間で「迷」っており、その結果現れるのは「愚公谷」や「翠屏」という詩人が望む場である。温庭筠の詩は杜甫・李白・白居易の詩と異なり、「迷」によつて表されているのは肯定的な感情であつて悲哀ではない。「路」に「迷」うとは現在の詩人の心境を表しており、「帰

心」の目的地としては「翠屏」がある。「迷」が現在の不安や動揺を表していたとしても、それは「帰る」ことができないうために来る不安ではなく、もつと肯定的なもの、目的地にたどり着く前の揺れる心を表しているのではないだろうか。到着地点が用意されているという点では他の詩と共通しているが、「迷」という状態を踏んで次の新しい世界へたどり着くのだという用法は注目すべきものであると私は思う。これは杜甫や李白、白居易と一線を画している。⁽²⁸⁾

次に宋代の「迷」を使った詩を幾つか例に挙げてみたい。

《王安石「秣陵道中口占二首」（秣陵道中の口占 二首）その一》

経世才難就 田園路欲迷 殷勤將白髮 下馬照青溪

（経世の才 就（な）し難し／田園の路に迷わんと欲す／殷勤に白髪を將て／馬を下りて青溪に照らす）

世を治める才は成就するのが難しい。田園を歩いていると、道に迷ってしまいそうである。馬を下りて青溪に自分の真つ白になった頭の影を映した。

『王安石詩文選注』⁽²⁹⁾では以下のように解釈している。この詩は「彼（王安石）の心中に長い間まとわりついていた「現実世界」と「隠居」をめぐる矛盾した心情の自然な流出である。作者（王安石）は世のために働きたいと願う、その才能がありながらも結局願うようにはいかず、自分が年老いて何者にもなれなかつたことを嘆き、田園生活に憧れを寄せている」⁽³⁰⁾。また、南宋の李壁は「自然へ深く心を寄せている」詩であると評している。私が注目したのは、この詩は温庭筠の詩と同様、日常（政治や官僚の勤めや都市）から非日常（田園、故郷、隠遁）への希求が描かれている点である。その上、王安石は日常と非日常の間で揺れる心を越えてはるかに強く田園へ帰着することを切望し、それを強く肯定している。「帰路」が失われていることへの「不安」はここには見られない。

《王安石「南浦」》

南浦隨花去 回船路已迷 暗香無覓處 日落画橋西

(南浦 花に随いて去り／船を回せば 路已に迷う／暗やかな香 覓る処無く／日は落つ 画橋の西)
 南浦に船を浮かべて花の香りに随つて下つていく。そうやって船を漕いでいるといつのまにか帰り道が分からなくなつて迷つてしまった。いったいこのひそやかな香りはどこから香つてくるのだろうか。華やかな橋の西方に夕日が沈んでいく。

『王安石詩文選注』では、「この詩は、作者が自分を大自然の中にとけ込ませた情景を描き出しており、境地はゆつたりとして果てしなく澄み渡り、濃厚な詩情・画意が備わっている」と解釈している。この「迷」にも、帰り道が失われたという前提(回船路已迷)があるが、詩人の心も詩の主題もそこにはないと私は思う。むしろ帰り道を失つた「迷」という状況を享受しているようである。詩人は自らの楽しみ(花の香)を追いかけて「迷」うのであり、その後日没という別の新しい景色が現れ、詩人はその景色に融けこみ、ともに楽しんでゐる。杜甫の詩の「涙／湘江の岸」といった景色・感情と比較すると違いは明かである。もう一つ宋詩を見てみたい。

《蘇軾「被酒独行、徧至子雲威徽先覺四黎之舍」(酒を被りて独り行き、徧ねく子雲・威・徽・先覺四たりの黎の舍に至る)》

半醒半酔問諸黎 竹刺藤梢步步迷 但尋牛矢覓帰路 家在牛欄西復西

(半ば醒め半ば酔うて諸黎を問う／竹刺 藤梢 歩歩に迷う／但だ牛矢を尋ねて帰路を覓めん／家は牛欄の西復た西に在り)

醒め気味でもあるがまだ酔い心地が残る自分は、黎の人々を訪ねてまわる。するどい竹の棘、長くのびた藤の蔓があり、一步一步、歩くごとに迷い込んでいく。だが心配することはない。帰り道を見つめるには牛糞を探せばよいのだ。私の家は牛の囲いの西さらにまた西にあるのだから。³³⁾

この詩も「帰路」に「迷」うことが描かれているが、むしろ詩人は黎の人々を尋ねて迷うことに重点を置いている。

この詩では「帰路」の喪失は唐詩と全く逆に捉えられている。迷うことによって、日常とは異なる場所へ行き、楽しむことを求めているようだ。

以上、宋代（北宋）の王安石・蘇軾の詩に共通する構造をまとめてみたい。宋詩における「迷」は、唐詩とは逆に詩人の希求した結果として描かれ、「帰路の喪失」はもはや悲哀や絶望ではなく、享受すべき境地として描かれている。図式化すれば「詩人の希求↓迷（帰路の喪失）↓新たに享受する空間」となるだろう。これは上で述べたように、「帰路」の捉え方が「永遠に失われたもの」（杜甫）から「探しあてることのできるもの」（蘇軾）へと変化したことにもあると私は思う。つまり、唐詩の「迷」が永久の「迷」（故郷喪失⇨悲哀・絶望⇨さまよう空間の提示）であるのに比べ、宋詩は一時的な「迷」として、「迷」った後の場を楽しんでいるのである。そこには時代の状況や詩人の世界観の違いが大きく関わってくるだろう。

上記の分析により、「魯山山行」の「迷」は已然であると私は考える。詩人は自分の希求する処、熊や鹿のいるところ（第三聯）へ迷い込む。そこは、詩人が享受して喜びを感じる場所として描かれるはずである。だが、梅堯臣の詩は、王安石・蘇軾の詩に見える「迷」の用法とはかなり異なっている。第三聯は、詩人がとけ込み楽しむ空間ではなく、距離を置いて眺める景色に近いのではないか。「日落（夕陽）」（王安石「南浦」）という広がりゆく空間や、詩人が「迷」い込んで楽しむ所の黎の人々の場（蘇軾）といった空間と比べると、熊・鹿と梅堯臣の関係は距離があるように私は思うのである。そこにズレがある。

また、歐陽修「遠山」との比較においても、「魯山山行」が奇妙に感じられる部分がある。上述したように、「遠山」が山色のイメージから「峯」「巒」と事物が動き出すダイナミズムを捉えて詩に詠む時、そこには自分の目（視覚）によって事物をさらに把握しようとする詩人の分析が働いていた。「魯山山行」では、高く低い千山↓峯の変化へと物事の様子が視覚で捉えられる。だが視覚で周囲の事物を分析した後、「迷」う（異なる空間への移動）ことに

よつて、第二聯の分析的な視点は途切れてしまふようである。つまり、ここにきて世界を把握しようとする方法（詩を読むとする方法）にズレが生じているように思われる。よつて、調和という問題で考えるならば、「隨處改」を使った「遠山」の自然さ（「魯山山行」のように途切れがない）に及ばず、「迷」の使い方も蘇軾や王安石（特に「南浦」）に及ばないと私は考える。だがそれでも「魯山山行」は詩として一種のバランスが保たれていると思う。それは、第四聯の「声」がそのバランスを保っているからではないか。

他で指摘があるように、鶏の鳴き声は「ある世界から別の世界への移行」という意味を持つ。⁽³⁴⁾ また、次の詩に見られるように、「声」はしばしば「覚醒」を表す。⁽³⁵⁾

《翁卷「処州蒼嶺」（処州の蒼嶺）》

歩歩躡飛雲 初疑夢裏身 村鷄数声遠 山舍幾家鄰 不雨溪長急 非春樹亦新 自從開此嶺 便有客行人⁽³⁶⁾

（歩歩 飛雲を躡む／初めは疑う 夢裏の身なるかと／村鷄 数声遠く／山舍 幾家か鄰なり／雨ふらずして溪長に急なり／春ならずして樹亦た新なり／此の嶺を開きしより／便ち客行の人あり）

飛んでいる雲を一步一步踏みしめるように（高い峠路を）歩み、まるで初めは夢の中にはないかと思つた。と、村の鶏の聲が遠くに聞こえ、山中の家が数軒隣り合つているのが見えてきた。雨はふらなくても谷川はいつも勢い良く流れ、春でもないのに樹もまた瑞々しく青々としている。この峠路が開けてからは、私が行くように、旅人が通るようになった。⁽³⁷⁾

南宋末頃の詩である。この詩は本当の夢を詠んでいるのではないが、詩人は雲を踏むような高所の峠でいつしか夢心地に陥つており、夢心地であることによつて、詩人が愉しんでいる境地が引き立つている。その夢の世界から現実
に立ち返らせるのは遠くから聞こえる鶏の「声」である。「声」は詩人に覚醒をもたらし、「夢」を終わらせ、別の世界へ導くという役割を果たしている。それはその後、目や耳に飛び込んでくる新しい事物を詩人が次々に詠んでいる

事から分かる。詩人は「声」を聞いた後「山舎」を目にし、谷川が勢い良く流れる音を聞き、木々の新鮮な緑を見る。このように「夢心地」から覚めた詩人は、事物を新鮮な感覚でとらえていく。最後に詩の流れを受けるのが第七句の「開」であると言えよう。「夢心地」↓「声」↓新たな感覚で捉えられる世界は「開」によって完結し、続けて自分を「客行人」と客観視することによって詩がしめくくられる。この詩は魯山山行の「声」の後の世界（詩の場）を考える一つの手がかりとなるだろう。

以上、「声」は覚醒する以前の状況に区切りをつけると同時に、目覚めた後の境地を表すという、言うならば締めくくりと始まりを表す語であると私は思う。とすると、「魯山山行」の「声」は、詩人が「声」を聞く（聴覚）ことによつて第三聯の「眺める」熊や鹿をひとたび完結させ、新たに鶏の音が示すもう一つの場所へと意識を移す働きを持つのではないか。詩を読み終えた時残るのは「声」の余韻と「もうひとつの場」の存在感である。それは聴覚で捉えられた世界である。「魯山山行」の場が、山（視覚によつて捉えられる場）↓熊・鹿↓また別の場の存在（聴覚によつて捉えられる場）へと移動することによつて、第三聯（熊や鹿の世界）は宙吊りにされず、詩の中に取り込まれ収められる。それは「迷」と「声」という文字の力によつて強い流れが詩にもたらされていることにも一因があるのではないだろうか。これが私の「魯山山行」解釈であり、詩がバランスを保っている理由として考えるものである。

四. 結 語

以上、「随処改」と「迷」の分析を通して「魯山山行」の特徴を考えてきた。「問題」で挙げた仮定に私なりの回答を付したい。①詩に表れた景色は、詩人が詠む感情、事物を把握しようとする方法によつて異なる。「随処」の表現に見られるように「遠山」は杜甫・杜牧の詩（唐詩）と一線を画している。②「迷」は異なる空間への移動を示す文字だが、唐詩が「迷」によつて悲哀を表すのに比べ、宋詩は楽しむものとしている。「魯山山行」も「迷」によつて

第二聯から第三聯へと、新たな空間へ移動していることが分かる。梅堯臣は意図的に「迷」をおいて移動を示したと言える。しかし他の詩に比べ、「迷」の後の空間が、効果的な使い方からかなり逸脱しているという印象を受けた。ただし、他の詩と比べて調和がとれていないとはいえないある種のバランスが保たれている詩であり、押し強い流れを持った詩であると私は考える。なお他にも「迷」を使った宋詩は多くあるがここでは触れなかった。⁽³⁸⁾ また詞も完全に除外した。よって宋代における全体的な世界観や、その中の「魯山山行」の位置を考察していない。拙論のように、文字のみの分析によって考えるだけでは大いに不足である。今後、全体的な研究を通して再度詩の流れを考えて見たいと思う。蛇足ながら、以上の詩の中で温庭筠の詩はかなり特別だと感じた。その理由も併せて考えてみたい。

注

- (1) 前野直彬『宋・元・明・清詩集』(平凡社、一九七三年)には「安定元年(二〇四〇)、襄城(河南省) 県令を辞任し、しばらくその付近に小旅行を試みたときの作」とある。制作時期については千葉貴「梅堯臣の生涯と『梅堯臣集』の版本について」(前掲)に詳しい。
- (2) 清・仇兆鰲註『杜少陵集詳註』五、卷十(「杜詩詳註」二卷、中華書局出版社、一九七九年、四五頁)より引用。「処発」を「発処」、「年」を「峯」、「門逕」を「逕没」、「待」を「走」とするテキストあり。趙汭之は「草」を「塞」とする。
- (3) 日本語訳に関しては、統国釈漢文大成『杜少陵詩集』を参考にした。
- (4) 「此詩歎驕旅寂寞也。上四言景、有故郷故国之思。下四叙情、有避世避人之意。」注2同書、四五頁より引用。
- (5) 仇兆鰲『杜少陵集詳註』(注2同書)の中で、「歴代註杜」として元・趙汭之の「選註」が引用されている。
- (6) 「公自乾元二年入成都、至宝応元年春、為三年矣。」注2同書、四五頁より引用。
- (7) 詩全体を付す。「憑高送所親 久坐惜芳辰 遠水非無浪 他山自有春 野花隨処発 官柳著行新 天際傷愁別 離筵何太頻。」
- (8) 以下、「隨処」を使った詩を脚注に付した。これらの詩は「遠山」「魯山山行」との比較にはあまり意味をなさないと思うため本文中で触れなかったが、「隨処」の意味を考える上で必要だと思われるために付した。《孟浩然「歲除夜会樂城張少府宅」》「曠昔通家

- 好 相知無間然 統明催画燭 守歲接長筵 旧曲梅花唱 新正柏酒傳 客行隨処案 不見度年年」。『孟浩然詩集校注』（巴蜀書社、一九八八年、三七六〜三七七頁）より引用。題名は明活本・全唐詩も同じ。清本では「歲」が欠けている。汲古閣本はこの詩と「除夜樂城逢張少府」を並列しており、一題に二詩となっている。この詩は宋本には掲載されていない。《温庭筠「贈越僧岳雲二首」その二》「蘭亭旧都講 今日意如何 有樹閑深院 無塵到淺沙 僧居隨処好 人事出門多 不及新春雁 年年鏡水波」『全唐詩』卷五八一「温庭筠七、清・曾益等箋注『温飛卿詩集箋注』（上海古籍出版社、一九八〇年、一五四〜一五五）より引用。題名「雲」を「雪」に、「莎」を「沙」に作るテキストあり。両詩の「隨処」は「不拘何地」に近いと思われる。ここでの「隨処」は、詩人が景色を眺めて用いた言葉ではないが、「隨処」に「案」「好」が付くことによって、状態を形容するものとして使われている。
- (9) 「歐陽修「遠山」の解釈は戸倉英美「風景の誕生とその崩壊―文学表現から見た自然の見方の変化」『中国―社会と文化』第八号（一九九三年所収）を参照・引用。
- (10) 『全唐詩』卷五二四、杜牧五より引用。
- (11) 吉川幸次郎は「唐人の愛するのは瞬間の感情の燃焼である」と述べ、風景として「瞬間に感情をもえあがらせる落日、斜陽、夕陽が、しばしば歌われる」と述べている。「燃焼と持続―六朝詩と唐詩」『吉川幸次郎全集』第七卷所収、筑摩書房、一九六八年、五五八頁。
- (12) 笺文夫注『梅堯臣』（中国詩人選集二集第三卷）岩波書店、一九六二年、三六頁。
- (13) 今關天彭・辛島曉『宋詩選』（漢詩大系第十六卷）集英社、一九六六年、七二頁。
- (14) 前野直彬『宋・元・明・清詩集』平凡社、一九七三年、宋八頁。
- (15) 『全唐詩』卷二三四、杜甫十九より引用。この詩は仇兆鰲『杜少陵集詳註』（注2）に掲載されていない。
- (16) 杜甫には「迷」が故郷喪失と共に使われている詩が多い。「無家別」でも「近行止一身 遠去終転迷 家郷既蕩尽 遠近理亦齊」と詠まれている。
- (17) 『全唐詩』卷一八一、李白二二より引用。楊齊賢註本、王琦註本では「連声」とするが「遠声」とするテキストもある。
- (18) 日本語訳は大野實之助『李太白詩歌全解』（早稲田大学出版部、一九八〇年、九〇七頁）を参照。
- (19) 『全唐詩』卷一三三、白居易九より引用。第一六句「出沒」を「出入」とするテキストあり。

- (20) 日本語訳に關しては、統国釈漢文大成『白楽天詩集』を参考にした。
- (21) 劉学錯・余恕誠『李商隱詩歌集解』（中華書局、一九八八年、七一〇頁）より引用。
- (22) 「此寄婦之詞也。起句屬己、嘆未遂其婦情、次句屬妻、料無心於裝束。三句又屬妻、言其抱子之情。四句兼屬己、怨其分離之苦也。第二句用山鷄自愛其羽以比女為悅己者容。曰「未判」借其形容者、正為下文兩處棲也。」（注21同書、七一一頁。）
- (23) 「一自己、二佳人之美。」（注21同書、七一一頁。）
- (24) 「首言身在炎方、次句自負才華、兼寓幕僚之慨。三四憶母子之娛樂、恨南北之分離。」（注21同書、七一一頁。）
- (25) 注21の書の編者按語「首句謂己身居嶺外、遙望京華、峯巒萬里、歸路亦迷。次句謂己文采華然、豈甘與山鷄等伍、「越鳥誇香荔、齊名亦未甘」、與此意近。馮謂「自負才華、兼寓幕僚之慨」、極是、屈、程以為指妻、殊誤。三句遙想妻子抱雛之樂、四句乃因此而益嘆兩地分棲、不得享家室天倫之樂、応上「歸路迷」。」（注21同書、七一一〜七一二頁。）
- (26) 温庭筠にも「迷」を使つた詩は多い。《温庭筠「雨中與李先生期垂釣先後相失因作疊韻」》「隔石覓屐跡 西溪迷鷄啼 小鳥擾 曉沼 犁泥齊低畦」ここでは、李先生とはぐれた詩人が西溪に迷い込み、明け方の風景を楽しんでいる様子が描かれている。この「迷」は前述の盛中唐の杜甫の詩等に比べて、後述する王安石の「迷」に近いと思われる。温庭筠の詩はちょうど過渡期のものなのだろうか、それとも詩人の特徴の違いなのだろうか。但し、温庭筠が詞に長け、それまでの詩と違つた世界を詠むことと併せて考えることが必要であろう。また《温庭筠「経李徵君故居」》「霧濃煙重草萋萋 樹映欄干柳拂堤 一院落花無客醉 五更殘月有鷄啼 芳筵想像情難尽 故苑荒涼路已迷 惆悵羸驂往來債 每經門巷亦長嘶」は、かつて賑やかだった屋敷が荒れ果てていることへの悲哀の情を詠っている。これは白居易の詩に近いと思われる。
- (27) 清・曾益等箋注『温飛卿詩集箋注』巻第七（上海古籍出版社、一九八〇年、一四八頁）より引用。「因」を「応」に、「余亦還」を「子敬懷」にするテキストあり。
- (28) 温庭筠は隱遁への憧れ・希求を詠つた詩が多い。例えば「開聖寺」「宿雲際寺」（注27同書、七六頁、一七二頁）等、仏教への憧れ、寺院の静謐なありさまが多く詠われている。
- (29) 高克勳選注『王安石詩文選注』上海古籍出版社、一九九四年。
- (30) 「王安石在行路途中随口吟成的這首詩、實際上是長期縈繞在他心中的入世与出世的矛盾心情的自然流露。作者有經世之願、也有經世之才、却始終未能如願、不得不感嘆自己年老無成、而寄情于田園生活。詩写得婉曲深摯、筆墨凝煉。」（注29同書、六〇頁。）

- (31) 「傾倒自然。」南宋・李壁註「王荆文公詩李壁注」(上海古籍出版社、一九九三年)より引用。李壁は一一五九〜一二二二、南宋の人。『宋史』卷三九八に伝記がある。
- (32) 「這首小詩就生動地描寫出了作者這種將一己熔于大自然之中的情境、意境閑澹、明淨空靈、具有濃郁的詩情画意。」(註29同書、六一頁。)
- (33) 日本語訳は『中國詩人選集二集 蘇軾(下)』(岩波書店、一九六二年、八七〜八八頁)を参考にした。
- (34) 梶村永「梅堯臣「魯山山行」にかかる雲く鶏声との関わりから」(後掲)を参照。
- (35) 「声」が覚醒をもたらすことを詠んだ詩を以下に挙げる。詩は「声」に関わる節のみを引用した。(《温庭筠「贈隱者」》「醉後楚山夢 覺來春鳥声」)／《蘇舜欽「夏意」》「樹陰满地日當午 夢覺流鶯時一声」／《汪藻「春日」》「茅茨煙暝客衣濕 破夢午鷄啼一声」(後掲、梶村論文で引用)／《歐陽修「奉使道中作」》「客夢方在家 角声已催曉」／《王安石「書湖陰先生壁二首」》其二》「黃鳥數声午夢殘 尚疑身屬半山園」／《范成大「四時田園雜興」》「柳花深巷午鷄声 桑葉尖新綠未成 坐睡覺來無一事 滿窗晴日看蚕生」。また、鶏や鳥の声だけではなく、鐸の音や風雨の音など様々な「声」が「夢」と結びついている。(《陸游「夏日昼寝夢遊一院 闐然無人簾影滿 惟燕颺箏弦有声 覺而聞鉄鐸風響璆然 殆所夢也邪 因得絶句」》「桐陰清潤雨余天 簫鐸搖風破昼眠」)／《黄庭堅「六月十七日昼寝」》「馬醫枯其喧午枕 夢成風雨浪翻江」(この詩は「夢から覚める」という主題ではないが、「声」(音)と現実世界、夢との関係を表わすものとして例に挙げた。音(声)は夢と現実世界の媒介物としての役割を担っている。)
- (36) 『永嘉四靈詩集』(浙江古籍出版社、一九八五年、一八八頁)より引用。
- (37) 日本語訳は前野直彬「新装版宋詩鑑賞辞典」(東京堂出版、一九九八年、四一〜四二頁)を参考とした。
- (38) 例えば、《陸游「山行」》「眼辺処処皆新句 塵務經心苦自迷 今日偶然親拾得 乱松深处石橋西」／《李彌遜「雲門道中晚步」》「層林疊嶂暗東西 山輒岡回路更迷 望與游雲奔落日 步隨流水赴前溪 樵婦野燒孤煙尽 牛卧春犂小麦低 独繞輞川图画裏 醉扶白叟杖青藜」／《蕭立之「茶陵道中」》「山深迷落日 一徑官無涯 老屋茅生菌 餓年竹有花 西來無道路 南去亦塵沙 独立蒼茫外吾生何処家」等がある。上述の「迷」の解釈は数詩から抽出されたものに過ぎず、宋詩一般の傾向とは言い切れないので、改めて分析してみる必要がある。また詞における「迷」もここでは全く考慮に入れていない。